

国定国語教科書にみられる人間関係

——第一期から第六期まで——

渡 辺 通 子

一 はじめに——なぜ教科書研究か、なぜ人間関係に
目するの

本研究の目的は、国定国語教科書にみられる人間関係の類型を抽出して分析・検討することで、教科書の中に、人間関係がどのように現れてきたのか、近代学校教育の特質を通時的に明らかにすることである。

教科書を対象とした先行研究では、教科書成立の過程を明らかにすることや教材内容の分類、文体や語彙、語法研究が重点的になされてきた。本研究では、教科書がその受け手である子ども人間形成や行動様式に及ぼす影響に着目する。

そこで本稿では、教科書教材に登場する人間関係に着目し、教科書にどのような人間関係が示されて子どもたちの社会化が促されたのかを探索。人間関係、すなわち対他関係の存在は、コミュニケーションを成立させる前提となるものである。他者の存在を認め、同時に、相手から認められることで互いが主体として確立し、両

者の関わり合いが可能となる。そしてまた他者との関わり合いを通して言語運用の必要性が現れる。子どもは、他者との関わり合いの中で言語の運用能力を身に付け、社会性を備えていく。以上のような考えに立ちながら、ここでは教科書の量的分析を中心に行う。本稿は、教科書教材本文から得られるコミュニケーションの質的分析のための基礎的データと位置づけられるものである。

二 研究対象と方法

二一 研究対象

分析対象は、一九〇四（明治三七）年に教科書の国定制度が成立して以来、終戦後の一九四九（昭和二四）年に検定教科書が使用されるようになるまでに刊行された国定国語教科書である。敗戦直後の一九四五（昭和二十）年度後期の「削除・修正」（いわゆる墨塗り）教科書については、使用時期が短く、かつ文部省から各都道府県、そして学校現場への移牒の時期も内容も統一されていないため対象外とした。【表一】に、時代区分と対象を

【表1】対象教科書と時代区分

時代区分	区分と教科書・巻数	発行年	巻頭の句、性格等	使用者出生年月
明治期	第一期国語教科書 「尋常小学読本」1～8	明治37 —42年	イエスシ	明治30.4～36.3 1897～1903
	第二期国語教科書 「尋常小学読本」1～12	明治43 —大正6年	ハタタココマ	明治36.4～44.3 1903～1911
大正期	第三期国語教科書 「尋常/小学国語読本」 1～12	大正7 —昭和7年	ハナハトマメマス	明治44.4～大正15.3 1911～1926
	第二期修正国語教科 「尋常小学読本」1～12	大正7 —昭和12年	ハタタココマ	明治44.4～ 1911～
昭和戦前期	第四期国語教科書 「小学国語読本」1～12	昭和8 —15年	サイタサイタサクラガサイタ	大正15.4～昭和9.3 1926～1934
	第五期国語教科書 「ヨミカタ」1・2 「よみかた」3・4 「初等科国語」1～8	昭和16 —20年	アカイアカイアサヒアサヒ (「コトバノオケイコ」1・2及 「ことばのおけいこ」1・2は除く)	昭和9.4～14.3 1934～1939
昭和戦後期	暫定教科書 同上	昭和21年	アカイアカイアサヒアサヒ	昭和9.4～15.3 1934～1940
	第六期国語教科書 「こくご」1～4 「国語」3年上～6年下	昭和22 —24年	おはなをかざる みんないいこ (昭和24年検定制度発足。 本書は24年度も使用)	昭和15.4～18.3 1940～1943

*「国語教育資料 第2巻 教科書史」東京法令出版、1981.、中村紀久二「国定教科書の歴史」(「復刻 国定教科書(国民学校期)解説」はるぶ出版、1982)及び国民教育研究所編「教科書問題—今日の焦点とその歴史—」労働旬報社、1981.を参考に作成した

【表2】国定教科書に現れた人間関係

	親子	兄弟	夫婦	祖父母	親族	男女	天皇	皇族	王室	君臣	上官 下官	同僚	師弟	友人	敵味方	売買	老若	外国	その他
第一期	18.9	6.3	1	2.1	2.1	2.1	8.7	1.4	0	3.1	1.1	0	4.2	10.1	7.4	1.7	4.2	12.6	13
第二期	10	5.3	1.5	1	2.5	3.8	5.8	1.9	0.6	10.4	5	2.9	1.9	3	10.6	2.8	2	8.7	20.3
尋読	11.7	8.2	2.8	1.8	3.4	3.3	4.2	0.9	0.4	8.4	5.1	5.8	2.4	5.2	7.6	1.4	1.6	7.9	17.9
国読	14.5	5.4	2.8	2.4	3.2	3.2	2.5	0	1.5	8	6.6	3.4	3	6.6	6.8	1.6	1.9	6.3	20.3
第四期	12.8	6.4	2.9	0.8	3.1	4.2	3.9	1.5	0	10.2	5.8	3.8	2.8	4.4	10	2.4	0.8	6.2	18
第五期	12.9	6.1	1.7	1.2	2.8	2.6	4.2	1.6	0.2	10.6	4.7	10.7	2.7	9.6	10.5	0.7	0.8	3.7	12.7
暫定	14.4	7.8	3.3	1.7	2.4	4.5	1.2	1.5	0.4	4.4	1	6.1	7.8	16.6	1.8	0.2	1.3	1.6	22
第六期	15.6	8.1	2.1	2.4	3.4	3	0.4	0.1	0.8	0.1	2.1	2.4	9.3	26.4	0.1	2.4	0.6	1.7	19

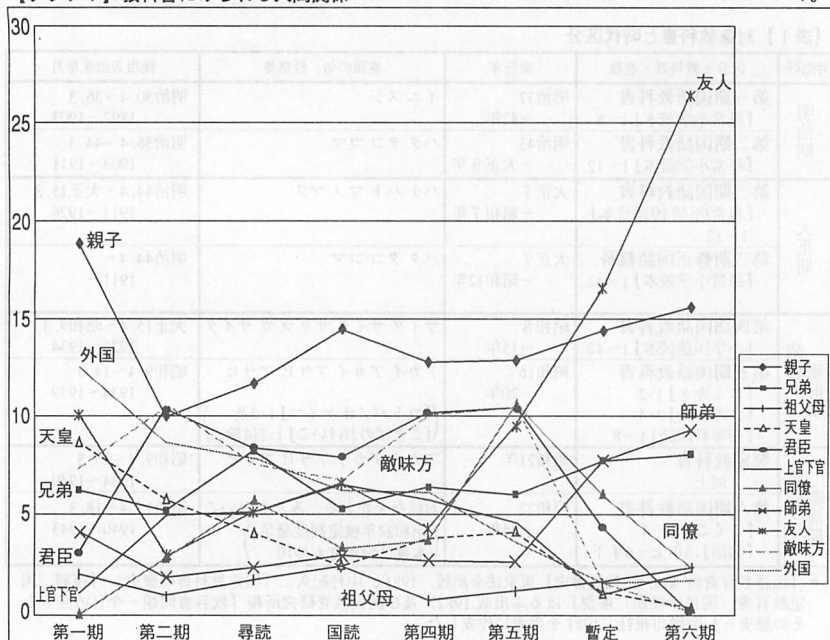
示した。なお大正期には、同時に二種類の国語教科書が出されているため、第二期を修正した読本を「尋読」、新たに編集されて、一般に第三期とされている読本を「国読」と表記する。戦後の暫定国語教科書は「暫定」と表記し、それ以外はすべて発行期で表記する。引用した教科書教材の表記は、「期」巻の順で示す。(例「第一期」巻「第一課の場合は、「第一期」)

二二二 研究方法

教材本文中、複数の人物が登場し、その人物に主体としての行為がある文例、及び他者を想定した主体としての行為のあり方を示す文例を分析対象(韻文は除く)とし、その際の人間関係とその頻度を【表2】にまとめた。同一課でも小見出しや符号が付いて、新たな場面設定がなされた場合には、新たにカウントした。

【グラフ1】教科書にみられる人間関係

%



【表4】類型順位上位

順位	明治期		大正期		昭和戦前期		昭和戦後初期	
	第一期	第二期	尋読	第三期 国読	第四期	第五期	暫定教科書	第六期
1	親子 18.9	その他 20.3	その他 17.9	その他 20.3	その他 18.8	その他 13.5	その他 22.0	友人 26.4
2	その他 13.0	敵味方 10.6	親子 11.7	親子 14.5	親子 12.8	親子 12.9	友人 16.6	その他 19.0
3	外国 12.6	君臣 10.4	君臣 8.4	君臣 8.0	君臣 10.2	同僚 10.7	親子 14.4	親子 15.6
4	友人 10.1	親子 10.0	兄弟 8.2	敵味方 6.8	敵味方 10.0	君臣 10.6	兄弟 7.8	師弟 9.3
5	天皇 8.7	外国 8.7	外国 7.9	友人 6.6	兄弟 6.4	敵味方 10.5	師弟 7.8	兄弟 8.1

【表3】類型総数

	類型総数
第一期	286
第二期	837
尋読	1107
国読	1076
第四期	1354
第五期	1076
暫定	820
第六期	1100

各教科書の類型総数は【表3】の通りである。類型については、唐澤の教科書の内容分析による研究やコミュニケーション研究の岡部による分類、久米による領域を参考に、「対人」「集団（組織）」「異文化（国際）」の三つのレベル（コンテキスト以下レベルと表記）に仮説的に類型化した。

データの抽出は、外国を除いては対人レベルを基本にし、さらに家族親族・君臣上下・学校（師弟・友人）の集団（組織）レベルから分析を加えた。学制の改革により、『第二期』以降は修業年限が四年から六年に延長され、教材数も増えたことから百分率に直した数値を比較検討した。

三 分析

三― 各期の特徴

【グラフ1】は、【表2】の主な類型をグラフ化して各期の傾向を示したものである。また【表4】に各期の類型上位を示した。

『第二期』と戦後の教科書を除いて、

各期教科書中、最も多い類型は親子である（その他を除く）。『第一期』では敵味方、戦後の『暫定』と『第六期』では友人である。各期の増減の変化を以下にまとめる。

(一) 『第一期』から『第二期』

（「イエスシ読本」から「ハタタコ読本」）

『第一期』から『第二期』の修正で、君臣（ $+7.3$ ）・上官下官（ $+3.9$ ）・敵味方（ $+3.2$ ）・男女（ $+1.7$ ）のほか六類型が増加し、親子（ -8.9 ）・友人（ -7.1 ）・外国（ -3.9 ）・天皇（ -2.9 ）・師弟（ -2.3 ）・兄弟（ -1.0 ）のほか二類型が減少した。

『第一期』では親子が最も多く、続いて、その他（ 13.0% ）、外国（ 12.6% ）、友人（ 10.1% ）の順である。『第二期』ではその他を除き最も多いのは、敵味方（ 10.6% ）で、君臣（ 10.4% ）、親子（ 10.0% ）が僅差で続く。

(二) 第二期から第二期修正（『尋読』）と第三期（『国読』）

（「ハタタコ読本」から「修正ハタタコ読本」と「ハナハト読本」）

『第二期』と大正期の『尋読』及び『国読』とを比較すると、『国読』（ $\pm 0.1 \sim \pm 4.5$ ）の方が『尋読』（ $\pm 0.1 \sim \pm 3.0$ ）より増減の幅が大きく、増減の幅に差異が認められるものの、修正についてはどちらとも同様の傾向を示す。使用状況は圧倒的に『国読』の方が多かったとされるが、人間関係の類型の頻度数からは両教科書に大きな違いは認められない。同時代的な価値文脈に基づいて作られ

た教科書であるといえよう。増減の多かった類型を（『尋読』、『国読』）の順に示す。友人（ $+2.2$ ）、 $+3.6$ ・親子（ $+1.7$ ）、 $+4.5$ ）が増加し、天皇（ -1.6 ）、 -3.3 ・敵味方（ -3.0 ）、 -3.8 ）が減少した。

(三) 大正期（『尋読』と『国読』）から『第四期』

（「修正ハタタコ読本」と「ハナハト読本」から「サクラ読本」）

『尋読』及び『国読』と『第四期』とを比較すると、『尋読』（ $\pm 0.1 \sim \pm 2.4$ ）及び『国読』（ $\pm 0.1 \sim \pm 3.2$ ）のそれぞれの比較では修正の幅に差異があるが、いずれも大きな変化はみられない。共通して増えた類型として、君臣（ $+1.8$ ）、 $+2.2$ ・敵味方（ $+2.4$ ）、 $+3.2$ ）が特筆できる。（一）内は『尋読』、『国読』との差を示したもの（以下同じ）。

他は 1.5% 以下の増である。共通して減ったのは友人（ -1.1 ）、 -2.2 ）で、他は 2% 以下の減である。

(四) 『第四期』から『第五期』

（「サクラ読本」から「アサヒ読本」）

『第四期』と『第五期』とを比較すると、同僚（ $+6.9$ ）、友人（ $+5.2$ ）が大きく増える。その他七類型が増加しているが、いずれも 0.5% 以下の増である。減少した類型には、増加にみられたような 5% 以上のものはない。『第五期』では、その他を除いて、最も多い親子（ 12.9% ）に続いて、同僚（ 10.7% ）、君臣（ 10.6% ）、敵味方（ 10.5% ）が僅差で続く。

(五)『第五期』から『暫定』

(「アサヒ読本」から『暫定教科書』)

『第五期』と『暫定』とを比較すると、友人(+7.0・師弟(+5.1)が大きく増え、友人は、その他を除けば最も多くなる。男女・兄弟・夫婦・親子が2%未満の範囲で増えている。また減少した主な類型は、敵味方(-8.7・君臣(-6.2・同僚(-4.6・上宣下官(-3.7・天皇(-3.0)である。その他、親族・皇族・売買・老若・外国が減少した。5%を超える増減が四類型(友人・師弟・敵味方・君臣)あるのは、明治期の『第一期』から『第二期』の修正を超える変化である。

(六)『暫定』から『第六期』

(『暫定教科書』から『みんないい子読本』)

『暫定』と『第六期』とを比較すると、『第五期』から『暫定』への修正に引き続き、友人(+9.8)が更に増加して最も多くなる。反対に、君臣(-4.3・同僚(-3.7)は更に減少する。君臣・敵味方(0.1%)は、ほとんどみられなくなる。

三—二 各期の変化の特徴

以上をまとめると国定教科書に現れた各期の変化の特徴として、以下の諸点を指摘できる。

- ①(イ)『第一期』から『第二期』(ロ)『第四期』から『第五期』
(ハ)『第五期』から戦後期(『暫定』・『第六期』)への修正に

特徴的な変化がみられる。

- ② 六期を通じ、5%以上の増減を示す類型は、親子(8.9)・敵味方(8.7)・君臣(7.3)・友人(7.1)・同僚(6.9)・師弟(5.1)の六類型である。(一)内の数値は、増減の最大数を示す。

①のそれぞれの変化の具体的な特徴は次のとおりである。

- (イ)『第一期』から『第二期』への修正で、友人や親子といった私的な人間関係の重視から、上下・君臣といった公的な人間関係の重視、特に「タテの関係」が重視されるようになり、これが以後の基本的な傾向として戦前期まで継続される。

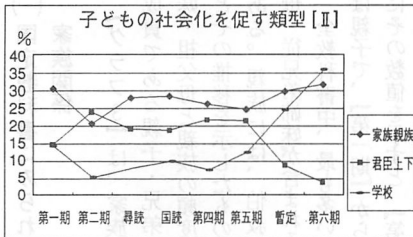
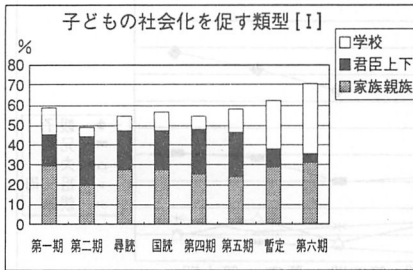
- (ロ) 戦時中に刊行された『第五期』の編集では、『第四期』と比べて時、同僚・友人が増えて「ヨコの関係」が重視される。

- (ハ) 戦後は類型順位に入れ替えがあり、戦前と大きくその傾向を変えている。友人・師弟の増加が特徴的で、『暫定』以降は親子と友人の順位が逆転して友人が最も多くなる。反対に『第五期』から『暫定』、『第六期』への修正を通して敵味方・君臣・同僚が減少し、前二者は1%未満となる。

三—三 子どもの社会化を促す集団(組織)

【表2】から主な類型を取り出し、子どもの社会化を促す集団(組織)レベルで組み直して示したのが【グラフ2】である。次に挙げる三集団(組織)は、『第一期』から『第六期』まで、全類型のおよそ50%~70%を占めている。また、先に得た分析結果に示されたように、各期の修正で特徴的な傾向を示す類型を主と

【グラフ2】子どもの社会化を促す集団(組織)【I】【II】



- A 家族親族 [親子+兄弟姉妹+夫婦+祖父母+親族]
 B 君臣上下 [天皇+皇族+王室+君臣+上宣下宣]
 C 学校 [師弟+友人]

したまとめりであることから、教科書編集上、これらの集団の中で子どもの社会化を想定していると考えられる。

Aは家族や親族の血縁を中心にした集団(組織)であり、Bは天皇との関係を含め、君臣や労使の主従関係を中心とした上下関係に基づく集団(組織)である。近代以前の君臣主従と近代以降の軍隊や労使間の上下に分けられる。Cは近代学校教育の成員である教師と生徒との関係、友人同士の関係で、学校という教育の

場を中心とした人間関係の集団(組織)である。

【グラフ2】にみられるように、教科書に現れる人間関係は、家族親族レベルが最も多いことから、子どもの社会化は家族親族関係を主としていたことがわかる。

しかし、戦後は、学校レベルが増え、『第六期』では家族親族が31.6%であるのに対し、師弟・友人は35.7%と順位が逆転する。学校を中心とした人間関係の中で子どもの社会化を促すような変化がみとれる。この傾向は戦後の特徴であるが、端緒は『第五期』にみられる。『第五期』の師弟・友人は12.3%と、これまではひと桁台だったものが10%台に増加している。その後、『暫定』で24.4%、『第六期』で35.7%とさらに上昇している。

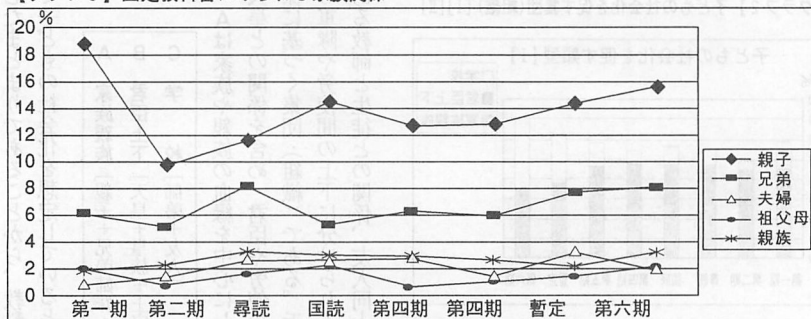
師弟・友人の重視は『第一期』(14.3%)にもみられるが、『第二期』(4.9%)で減少し、以降は10%に満たなくなったものである。

このように教科書の中では、学校における人間関係が子どもの社会化にかかわるようになるのは戦後であり、それ以前は家族親族に続いて、君臣上下が主であった。『第二期』では君臣上下が最も多く23.7%であり、これと同じ傾向を示すのが昭和戦前期の『第四期』(21.4%)と『第五期』(21.3%)である。

『第五期』から昭和戦後期の修正では、君臣関係が『第五期』21.3%→『暫定』8.5%→『第六期』3.5%と急減するのに対し、学校が『第五期』12.3%→『暫定』24.4%→『第六期』35.7%と上昇し、君臣上下と学校とは対照的な傾向を示している。

次に、右で述べた集団(組織)ごとに各類型の推移の特質をみていく。

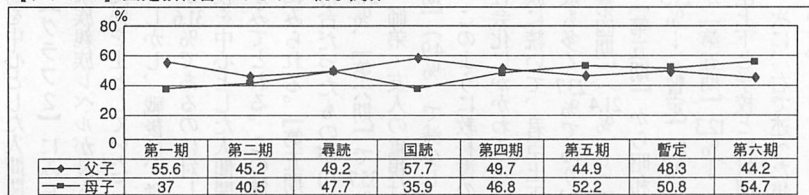
【グラフ3】 国定教科書にみられる家族関係



(一) 国定教科書にみられる
家族関係

【グラフ3】は、家族の成員である親子・兄弟姉妹・祖父母と親族の頻度数とその推移を示したものである。親族には、伯叔父母・従兄弟姉妹が含まれる。全教科書中、最も多いのは親子で、『第一期』から順にその数値を示すと、『第一期』18.9%→『第二期』10.0%→大正期『尋読』14.5%→『第四期』12.8%→『第五期』14.4%→『第六期』15.6%となっており、他の類型との差も大きい。親子は、『第一期』(18.9%)に最も多く現れ、反対に『第二期』(10.0%)で最も少なく、『第二期』以降は再び増加傾向となる。

【グラフ4】 国定教科書にみられる親子関係



次に兄弟姉妹が続く。兄弟姉妹は『尋読』(8.2%)が最も多く、『第二期』(5.3%)が最も少ない。戦後になると増加する。また祖父母は、大正期に微増している。『第一期』で示された祖父母、父母とその子の三代代からなる家族制度(『第一期』五一「わたくしの家」)は、『第二期』以降では、兄弟姉妹の数も増えて農業本位の大家族として描かれる。(『第二期』三十四「タクシノウチ」、『尋読』三十五「わたくしのうち」)。だが、頻度数からは親子と兄弟姉妹の類型が占める割合が大きく、祖父母は少ない。教科書では、親とその子どもたちを中心とした関係が重視されていることがわかる。

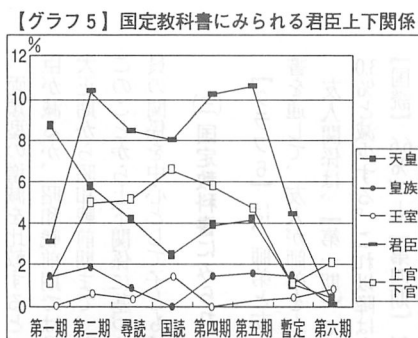
次に、親子関係のうち、父子関係と母子関係に分けて推移の特質をみていく。【グラフ4】は親子関係について、父子と母子の現れ方の割合を示したものである。

明治期の教科書では、「凡そ婦人の道は夫を助けて家政を治め子に教へて家名をあげしむるに在り」「男子は外に出てて不在勝のものなれば幼児は母の感化を

受けること最も多し」(『第二期』二二二主婦の務)とあるように、家政は母の役割とされ、母と子どもとの関係が強調されているが、類型頻度は『第一期』から『第四期』までは父子の方が多い。しかし、『第五期』からは逆転して、以降は母子関係が父子関係を上回るようになる。

(二) 国定教科書にみられる君臣上下関係

【グラフ5】は、天皇を含めた君臣上下関係を示したものである。『第二期』以降は、天皇・君臣・皇族の三類型は同じ傾向を示している。即ち明治期から大正期にかけては減少し、昭和戦前期には微増するが、戦後に大きく減少する。



明治期から大正期にかけての減少と昭和戦後期の減少とは異なる背景を持つ。昭和戦後期の大幅な減少は、連合国軍の占領政策による民主化という戦後教育改革の理念に基づいて、ミリタリズムや超国家主義につながる皇国民教育が否定されたためである。明治期から大正期にかけての減少については、明治政府の急務であった天皇制の確立が達成されて、国家主義によ

る天皇の地位が揺るぎないものとなったため、あるいは大正デモクラシーの影響などが考えられるが、編集に直接関わる具体的な要因は明らかではない。

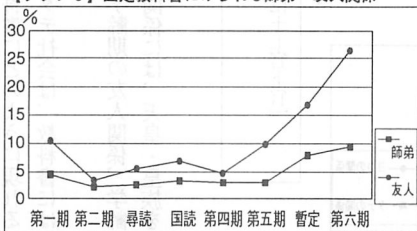
天皇について、その推移をみると、天皇が君臣(3.1%)よりも圧倒的に上位にあつたのは『第一期』(8.7%)のみで、『第二期』では逆転して君臣(10.0%)が多くなり、さらに大正期には上官・下官(『尋読』5.1%、『国読』6.6%)も天皇(『尋読』4.2%、『国読』2.5%)より多くなる。戦後はさらに減少する。

しかし天皇の記載は全くなかったわけではない。第二次墨ぬり通牒(一九四六(昭和二十一年)一月二五日「国民学校後期使用教科書前除修正表」)では、天皇との関係を取り上げた『第五期』(二五田道間守)について「取扱注意(今は可 天皇制の問題確定後は考慮す)」(傍線部引用者注)とされていたが、一九四六(昭和二十一年)使用開始の『暫定』(1.2%)からは消えなかった。

だが、その量は激減し、『暫定』の「三三光明皇后」「七一古事記」など、天皇や皇后の功績を記す内容に限られる。

上官・下官と君臣の二類型の推移をみると、『第一期』から『第二期』への修正でどちらも増加するが、以後は『暫定』まで、最も多いのは君臣である。

【グラフ6】 国定教科書にみられる師弟・友人関係



両類型の増減を比較すると、大正期では、上官下官が増えて君臣が減るが、昭和戦前期では君臣が増えて上官下官が減っており、大正期から昭和戦前期まで、両類型は対照的な変化を示している。このことから上下関係に基づく人間関係は、前近代型の組織の成員の関係を中心として子どもに示されていたといえよう。

(三) 国定教科書にみられる師弟・友人関係

【グラフ6】は、師弟と友人関係を示したものである。全教科書を通して、友人が師弟を上回っている。

友人関係は、『第一期』では10.1%だったものが『第二期』で3.0%と減少する。これ以降は大きな変化がないが(『尋読』5.2%、『国読』6.6%)→『第四期』44%、その後、『第五期』で9.6%に増加し、戦後は、『暫定』16.6%→『第六期』26.4%とさらに増加する傾向がみられる。師弟も同様の傾向を示すが、友人ほど大きな変化はみられない。

また『第二期』から『第四期』まで、両類型間の差は1.1~3.6の範囲にあるが、『第五期』以降になると、『第五期』6.9%→『暫定』8.8%→『第六期』17.1%と、友人が師弟を大きく上回って増加する。『第一期』にも注目したい。『第一期』では、友人(10.1%) 師弟(4.2%)とも、増加傾向を示し始める『第五期』の友人(9.6%) 師弟(2.7%)より頻度数が多い。

三 四 タテの関係とヨコの関係

次に、A「同僚+友人」のヨコの関係とB「天皇+皇族+王

室+君臣+上官下官」のタテの関係が教科書にどのように現れるのか比較をした。日本社会を特徴づけるタテ社会は、教科書にはどのように現れているのだろうか。

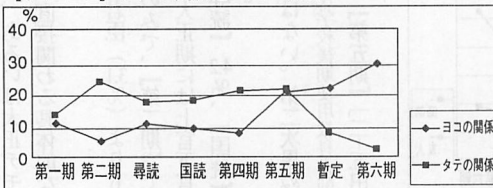
以下のように、ヨコの関係としては、学齢期の友人関係、学齢期以降の同僚関係が挙げられる。タテの関係には、天皇・皇族を含めた君臣上下関係が挙げられる。

A ヨコの関係「同僚+友人」

B タテの関係「天皇+皇族+王室+君臣+上官下官」

各期の推移をみると、ヨコの関係は、『第一期』10.1%→『第二期』5.9%→大正期『尋読』11.0%―『国読』9.9%→『第四期』8.2%→『第五期』20.3%→『暫定』22.7%→『第六期』28.8%である。またタテの関係は、『第一期』14.3%→『第二期』23.7%→大正期『尋読』19.0%―『国読』18.6%→『第四期』21.4%→『第五期』21.3%→『暫定』8.5%→『第六期』3.5%である。その推移をグラフ化して表したのが【グラフ7】である。

【グラフ7】タテの関係とヨコの関係



なる。戦後の教育施策が如実に現れた結果となっている。

ヨコの関係が最も低いのは、『第一期』で59%である。それに對しタテの関係は、『第二期』が最も高く23.7%で、『第六期』が最も低く3.5%となっている。『第四期』で8.2%だったヨコの関係は、『第五期』で20.3%と急激に増加し、タテの関係と接近している。『第五期』は、戦時体制下にあった国民学校期の教科書であるが、人口の水平移動が一層進み、ラジオの普及による情報伝達の変化など、明治以来の近代型社会が変革しつつある時代状況を反映したものと考えられる。

明治期から昭和戦前期までは、タテの関係が重視され、昭和戦後期はヨコの関係が重視されるようになる。『第五期』は、その過渡期にある。

三—五 子どもの教育の場の変化にみられる特徴

三—三、三—四をまとめると、以下の諸点が挙げられる。

① 子どもの社会化は、伝統的に血縁を中心とした集団（組織）を中心としてなされていたが、戦後は、学校がその役目を担うような編修である。

② 『第一期』から『第二期』の修正において、昭和戦前期までの特徴である家族親族と君臣上下の集団（組織）を中心としながら、子どもの社会化を促すという傾向が特徴づけられた。

③ 戦後は、天皇を含む君臣上下の集団（組織）を中心とした関係は大幅に減少し、その価値はほとんど認められなくなる。

④ 『第五期』は、戦前期の君臣上下の集団（組織）を重視する傾

向を示しながらも、戦後期につながる教育の場としての学校における人間関係を探り上げる傾向を内在している。

四 考察と課題

四—一 考察

人間関係の視点から教科書を分析することで、明らかになった各期の教科書における人間関係の現れ方の特徴を以下にまとめた。

一 『第一期』から『第二期』への修正で、人間関係の現れ方の基本がほぼできて、この傾向は、戦後、『暫定』が刊行されるまで継承される。戦前の人間関係における価値文脈は、『第一期』から『第二期』の修正で作られたといえよう。具体的には、血縁の重視、タテの関係の重視、父子関係の重視があげられる。

二 この傾向に変化がみられるのは、太平洋戦争の緊迫化する中で刊行された『第五期』においてである。ここでは、母子関係の重視、ヨコの関係の重視、学校における人間関係の重視への転換の兆しが見られる。

三 戦後は、人間関係の現れ方に大きな転換がみられ、これまでも明らかに異なった価値文脈で教科書編修がなされている。すなわち天皇を含めた君臣上下関係の排除、教育の場としての学校における人間関係の重視、君臣上下関係と切り離れたヨコの関係の重視である。

『第二期』で特徴づけられ、戦前期まで継続する一の傾向を底流

で方向づけたのは、次に示した「教育ニ関スル勅語」（以下、教育勅語と表記）の理念である。

教育ニ関スル勅語（明治十三年十月三十日）

朕惟フニ我カ皇祖皇宗国ヲ肇ムルコト安遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ国体ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦美ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ学ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ広メ世務ヲ開キ常ニ国憲ヲ重シ国法ニ遵ヒ一日緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ独リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顕彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ実ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治十三年 十月三十日

御名 御璽

「我カ臣民」「爾臣民」「朕カ忠良ノ臣民」「子孫臣民」とあるように、天皇を中心とした国家主義の臣民教育の理念が貫かれている。また「父母」「兄弟」「夫婦」「朋友」といった主な人間関係が取り上げられ、その徳目が示されている。

この教育勅語を否定し、三の傾向を方向づけたのは、「教育基本法」である。敗戦後のわが国の日本国憲法の精神と理念の実現

を目指した教育理念として立法化された。わずか十一條の構成ではあるが、教育の目的、方針、機会均等、義務教育、男女共学、学校教育、社会教育、政治教育、宗教教育、教育行政の各事項について、それぞれの基本原理を規定している。敵味方や君臣関係の排除など、戦後の教科書編修に大きな転換がなされたのは、この法律に基づくものである。以下に挙げた前文には「民主的で文化的な国家」の建設や「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間」の育成が明らかにされている。

教育基本法（一九四七（昭和二十二年）三月三十一日）

われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力をまつべきものである。

われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。

ここに、日本国憲法の精神に則り、教育の目的を明示して、新しい日本の教育の基本を確立する為、この法律を制定する。

分析の視点を人間関係に置いた今回の分析で得た各期の教科書の特徴は、必ずしも先行研究や当該教科書使用当時の教育現場の批評と一致するものではない。その意味で、これまで教科書編修上、語法主義に陥った無味乾燥な教科書と評価されている『第一期』に注目したい。『第一期』の特徴である君臣上下の関係より

も学校における人間関係を重視する傾向は、昭和戦後期に通ずるものがある。

また軍国主義的、国家主義的色彩で塗りつぶされた教科書とされてきた『第五期』にも、戦後期の教科書につながるヨコの関係を重視する人間関係の取り上げ方がなされており、子どもにとって従来とは異なる傾向を持つ人間関係の切り結び方が提示されている。

四―二 コミュニケーションの持つ普遍的な問題

本研究で得た数値と傾向は、量的分析を中心としたものである。教科書に現れた人間関係から、コミュニケーションの持つ普遍的な問題として次の二点を挙げる。

一 一人の人間が、社会的な役割にに応じて、複数の対人関係を切り結んでいること。

二 対人関係が集合して形成される集団（組織）は、子どもの社会化を促す場となるが、その取り上げ方の比重の差異は時代の要請によるものであること。

これらに共通するのは場の問題である。場とは、コミュニケーションの主体同士が作り上げる空間であり、そこに生まれる状況の脈絡を意味する。子どもたちは日々の生活の中で、例えば、ある者は親に対しては子であり、妹に対しては兄であるといったふうに、対人関係を多重に成立させる。そしてこれらの関係において、個のレベルのコミュニケーションの場を形成する。

同様に、後者の集団もまた個と個が複雑に絡み合う集団（組織）レベルのコミュニケーションの場を形成する。戦前期までの教科書では、集団（組織）レベルのコミュニケーションの場は、主として家族親族や君臣上下関係にあった。家族親族は私的な場を、君臣上下は公的な場を子どもに提供した。戦後の教科書では、これらに替わって学校がその比重を大きく増やした。

個のレベルで最も多く現れる類型は、『第二期』と戦後を除くと親子関係である。戦後はそれが友人関係と逆転する。親子関係にも父子関係の重視から母子関係の重視へと変化がみられる。

今後は、教科書本文にあたり、それぞれの類型において、関係が作りだす場に注目したい。教科書に現れる登場人物同士の関わり合いが作り出す場には、どのような人間関係のあり方がみられ、そしてその際にどのような言語の運用が求められていたのかといった質的な分析を加えていくことで、その内実を明らかにすることを課題としたい。

注

一 質的分析は、『第一期』と『第二期』を「明治期国定国語教科書にみられるコミュニケーション・スタイルの特徴」（『日本教科教育学会誌』第二六巻第二号、二〇〇三、五九―六八頁）、『尋読』と『国読』を「大正期国定国語教科書にみられるコミュニケーション教育の特徴」（『尋常小学読本（修正ハタコ本）』と国定第三期『尋常国語読本（ハナハト本）』との比較）―（『早稲田大学大学院教育学紀要別冊』第十号―二二〇三、三五―四六頁）、『大正期国定国語教科書にみられるコミュニ

テーション教育の特徴（国定第二期修正『尋常小学読本』と国定第三期『尋常小学国語読本』との比較）（『早稲田大学大学院教育学紀要別冊』第十一号一、二〇〇四、掲載予定、『第四期』と『第五期』を『昭和前期国定国語教科書』にみられる人間関係―第四期（サクラ読本）から第五期（アサヒ読本）へ―）（『早稲田大学国語教育研究』第二三集、二〇〇三、八十八―九二頁）にまとめた。

二、教科書の本文は、大正期『尋常小学読本』は、早稲田大学千厩文庫所蔵、筑波大学所蔵『尋常小学読本』（全て初版本）に、暫定教科書は中村紀久二監修『文部省著作 暫定教科書（国民学校用）』全三巻、大空社一九八四に、その他はすべて海後宗臣編『日本教科書大系近代編第六―九巻（国語三―六）』講談社、一九六三―一九六四による。

三、片上宗二『日本社会科成立史研究』風間書房、一九九三、二二七頁。吉田裕久『戦後初期国語教科書史研究―墨ぬり・暫定・国定・検定―』風間書房、二〇〇一、一二五―一二五頁。

四、『国語教育資料 第二巻 教科書史』東京法令出版、一九八一、中村紀久二『国定教科書の歴史』（『復刻 国定教科書（国民学校期）解説』ほるぷ出版、一九八二、四頁）及び国民教育研究所編『教科書問題 今日焦点とその歴史』労働旬報社、一九八一、を参考に作成した。

五、久米昭元『コミュニケーション研究の主な領域』橋本満弘・石井敏『コミュニケーション論入門』桐原書店、一九九三、一五―五三頁。岡部朗一『異文化コミュニケーション』有斐閣、一九八七、三三―三四頁。唐澤富太郎『教科書の歴史』創文社、一九五六、本稿では集団と組織レベルとコンテクストの区別はしない。

六、両教科書の使用状況であるが、『尋説』は東京・栃木・愛知・広島・山口・長崎・熊本の一府六県で、『国説』は全国各府県の三分の二以上で採

用され、『尋説』を採用した県も次第に『国説』に変更するようになった。奥田真丈『教科教育百年史』建帛社、一九八五、一三六―一三六頁。

七、『尋説』、第三期の『国説』及び第四期『サクラ読本』編修の文部省内の扱いは第二期の修正であった。井上越・古田東朔『国定教科書編集二十五年』武蔵野書院、一九八四、一九頁。

八、久保他三名『現代教育史事典』東京書籍、二〇〇一、八―一頁。

九、江本千之『教育勅語の煥発』国民教育奨励会編『教育五十年史』民友社、一九三二、一五七頁。

十、尾形裕康『日本教育通史研究』早稲田大学出版部、一九八〇、二六九―二八二頁。

付記 本稿は、第二二五回早稲田大学国語教育学会（二〇〇三年四月二六日）で発表した内容を加筆修正したものである。

（茨城県立多賀高等学校・茨城大学非常勤講師）